

人間科学科で学ぶ「こころ(スピリチュアリティ)」について

～学部特色入学試験、編入学試験及び推薦入学※により人間科学科を志望する皆さんへ～

学部特色入学試験、編入学試験及び推薦入学※においては、「人間理解に対し、特にこころ（スピリチュアリティ）の視点からのアプローチに興味があること」が出願の要件となっています。出願にあたっては、本パンフレットを熟読するとともに、下記のURLまたはQRコードにアクセスして映像を見て、“こころ（スピリチュアリティ）を学ぶ”ということについて、十分に理解を深めた上で受験してください。

※ 出願の要件となっていない推薦入学もあります。詳細は入学試験要項をご確認いただくか、関西学院大学人間福祉学部へお問い合わせください。



https://www.kwansei.ac.jp/s_hws/study/about/hhs/spirituality

関西学院大学 人間福祉学部
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL:0798-54-6844 FAX:0798-54-6845

○人間科学科の柱ーそれは「こころ」と「身体」

人間科学科は、「こころ（スピリチュアリティ）」と「身体」の両面から人間を理解することを目的としています。つまり、「こころ（スピリチュアリティ）」と「身体」に関する学問が人間科学科の2本柱です。学部特色入学試験、編入学試験及び各種推薦入学では、特に人間理解について、「こころ（スピリチュアリティ）」に関心を持ち、その学びを深めたいと考えている学生を求めます。

○「こころ（スピリチュアリティ）」とは？

“「こころ（スピリチュアリティ）」と「身体」の両面から人間を理解する”と聞くと、多くの方が、身体的側面ーなかでも身体パフォーマンスーに焦点を当て、こころ（メンタル）を強くもつことでパフォーマンスを高めることや、スポーツ心理学を用いて競技成績を上げることがをイメージするかもしれません。その場合の「こころ」とは、精神力や逆境に負けない強い意志力といったものを指しています。しかし、人間科学科の「こころ（スピリチュアリティ）」は、身体運動やパフォーマンスを高めるための「メンタル」とは、根本的に異なるものです。

では、人間科学科が焦点を当てる「こころ（スピリチュアリティ）」とは、何を指すのでしょうか。これについて考える前に、まず、私たちを取り巻く社会に目を向けてみましょう。

私たちの社会は、物質的に豊かであり、便利なものに囲まれています。スマートフォンの普及によって、私たちは人にも情報にもアクセスしやすくなりました。また医療技術の進歩により、多くの病気が治るようになり、寿命も長くなりました。便利なものに囲まれて長生きできる社会。しかしこの社会で生きる私たちは皆、幸せを感じているのでしょうか。「楽しいときの“友達”はたくさんいるけれど、本当につらいときに話ができる“親友”はいない」という言葉を耳にすることが多いのはなぜでしょう。たくさんの情報にアクセスでき、SNSで人と繋がっていても孤独を感じたり、直接自分の思いを語り、理解し合える友人がない寂しさを感じていたり、何かしら生きづらいつ感じている人たちは、私たちの周りに少なからずいるものです。実際、10代、20代の自殺者がここ数年増加しているという統計も発表されています。

もう少し視野を広げてみましょう。私たちの社会には、様々な問題があります。親から虐待を受ける子どもたち、いじめを受けた経験を持つ人たち、自傷行為に苦しむ人たち、一人親で子どもを育てる人たち、障害を持って生きる人たち、人の助けが必要になる高齢の人たち、事故や犯罪に巻き込まれた人たち、自然災害で被災した人たち、最愛の人を亡くした人たち、路上で生活する人た

ち、難病を抱えて生きる人たち、死を目の前にした末期がんの人たち…。たくさんの方がこのような状況の中で苦しみながらも、生きることに向き合っています。今はそのような状況にない人でも、突然の事故や病気で体が動かなくなった途端、いじめの対象になった途端、また、愛する人を失くした途端に、生きることが苦しくなったり、生きる意味を見失うかもしれません。また表面的には何の問題もなく元気そうに見える人でも、「自分は何のために生まれてきたのだろう」と漠然と不安を感じることもあるかもしれません。生きる意味や自分の存在価値が見出せない—このような苦しみは、誰でも持つものです。実は、人間科学科でいう“「こころ(スピリチュアリティ)」の側面から人間を理解する”とは、このような人の存在にかかわる苦しみ(スピリチュアルペイン)に目を向け、人間の存在やいのちの意味について考えていくことなのです。

さらに視野を広げてみましょう。私たちの社会は、科学技術の進歩によって人の生死のありかたが大きく変化しました。50年前、日常生活の中に当たり前にあった人の誕生と死は、今や病院に移り、生まれることも死ぬことも実感のないものになっています。また、いのちの選択やいのちの操作も可能になりました。出生前診断で障害のあることが明らかになった胎児を産むか産まないか、全身麻痺で意思表示のできない人の安楽死を認めるのか認めないのか。私たちの判断次第で人が生まれたり死んだりする社会の中で、私たちはどのような死生観を持てばよいのでしょうか。いのちの選択を迫られる私たちは、いのちについてどれほどのことを知っているのでしょうか。例えば、障害をもつ人やその家族は苦しいだけなのでしょうか。末期がんの人や家族はいつも悲しみに暮れているのでしょうか。人が生きる時、そこには苦しみだけでなく、喜びもあります。人間科学科では、いのちのあり方について、一般論だけでは見えてこない当事者の立場からも考えます。

これまで見てきたように、人間科学科が捉える「こころ(スピリチュアリティ)」とは、生きる意味や存在価値に根拠を与える、人間の存在にかかわる領域といわれるものです。言い換えると、生きる意味や存在価値、人との関係性、人を超える自然・宇宙・神との関係性、自分の信じる価値観や信条、これらは自らの存在を意味あるものとしてくれます。逆に、生きる意味がわからないとき、誰にも愛されていないと感じるとき、またいったい何を信じて生きればよいかわからないとき、私たちは「こころの痛み(スピリチュアルペイン)」を感じ、生きることすら苦しくなります。このように、「こころ(スピリチュアリティ)」は、単に身体運動やパフォーマンスを高めるための「メンタル」とは異なり、人が生きる意味を発見し、豊かに生きることと深く関係しているのです。

○人間科学科で「こころ(スピリチュアリティ)」を学ぶということ

人の苦しみはどこから来るのか、また苦しみを持つ人にどのように関わればよいのか、どうすれば人は支え合う社会を作ることができるのか、そもそも人間は何のために生まれ、ここに生きているのか。このような問いかけは究極的に「いのち」をどうとらえるのかという問い—私たちがどのような“いのち観”をもつのか—につながっていきます。

従来このような問いは、哲学や宗教が議論してきました。しかし人間科学科では、哲学や宗教だけでなく、様々な学問を通してこの問いに向き合います。人間科学科では、死生学、スピリチュアリティ演習、悲嘆学、生命倫理学などをはじめ、生まれてから死ぬまでの人間を、「全人」として理解するために、子ども学、人間科学演習、老年学等の科目が用意されています。

また、学びを現場で深めていくための「人間科学フィールドワーク」も用意されています。死にゆく人が最期まで生きるホスピスの現場、愛する人を亡くした人たちの遺族会、親と離れて生きる子どもたちの生活の場である児童養護施設、自死で親を亡くした子どもたちの支援プログラム、苦しい思いを打ち明ける人の声をひたすら聴く自殺防止の電話相談など、学生たちは苦しみや喜びに直接触れる現場に行き、そこで出会う人たちから、自らの生き方を問われる経験をしています。

以 上